

継続的で広域な観測資料は皆無です。そこで、全国の気象官署で行っている観測原簿資料の記事のうち「着雪により風の欠測」等の記載に着目しました。有人である気象官署は測器のメンテナンスが行き届いており、多少の軽微な着雪であれば欠測はしないはず、欠測するのであれば純粹に付着しやすい降雪事例であろうと考えました。この欠測事例と前述の発生条件をプロットしてみると、見事に当てはまりました。ここで学会で発表することを考えました。

当初、論文としてまとめることは全く考えていなかったのですが、次の二つのきっかけで投稿することを決めました。まず一つは、2005年の全国大会でポスター発表したところ意外と好評で、「予稿では引用できないから、早く論文としてまとめなさい」といった大変嬉しいコメントも頂き、大変励みになったことです。学会発表と雪工学分科会の着氷雪研究会で、熱心な議論をしていただいた多くの方々に感謝申し上げます。もう一つは、ポスター発表の翌年の「雪氷」に「着氷雪特集号」が企画されていたことで、編集担当委員の水津さんの次の言葉に勇気付けられたからでした。「私は、まとまっていた研究を「雪崩特集号」が出版されるというので、急いで何とかまとめて発表することがあります。その機会がな

ければ、論文としてまとめることをせずに終わってしまったかも知れず、後で、特集号がいい機会になったと感じました。つぼみを花として咲かしてください。」まさにその通りになりました！

投稿後は、査読者の方々からの丁寧な意見、適切なお指摘が、未熟な初稿を論文として掲載可能な状態に持ち上げるのに大変参考になりました。深く感謝申し上げます。また、この論文は自分の観測結果ではなく、先達の研究成果と観測資料の上に成り立っています。特に、論文の文献欄に記載した方々と、気象官署で観測に携わった多くの関係者の方々の観測継続に対する努力と熱意に敬意を表したいと思います。

この論文のもう一つの思い出は、改稿作業中に東京から札幌へ引っ越して転職したことです。荷解き前の段ボールにパソコンを置いて作業をするなど、論文作成に家庭で過ごす時間を費やしました。家族には心から感謝いたします。また同じような境遇で論文を書いている方々の励みに少しでもなれば幸いです。

最後にこれまでお世話になった方々に、もう一度深く感謝申し上げますとともに、これからも御指導と御鞭撻を賜るようお願いして、受賞の御礼の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。

論文賞を受賞して

株式会社富士通ソフトウェアテクノロジーズ 鈴木 亮平



このたびは、素晴らしい賞をいただきまして、誠にありがとうございました。新社会人となって大学から離れると同時に、雪氷の世界からも遠ざかりかけていた頃、思いがけずこのような立派な賞をいただき大変嬉しく思います。論文賞の推薦から授与に至るまで、お時間を割いて下さった学会関係者の方々に感謝いたします。

今回、受賞の対象となった論文「ASTER データによって得られたヒマラヤのデブリ氷河上の熱特性空間分布」は、名古屋大学大学院の博士論文(2007年)の主題として執筆しました。雪氷圏研究グループでは修士課程からお世話になり、海外での長期にわたる観測や学会発表など、氷河研究を通じて貴重な経験を積ませていただきました。

研究を始めた当時のことを振り返ると、研究意義を見出すことさえできず、ただフィールドへ行きたいという希望だけが先行していたことを思い出します。そのような状況から、研究論文にまで漕ぎつけられたのは、大学院における学生生活が非常に恵まれた環境にあったからに他なりません。

まず、恵まれていたことは、海外における氷河観測の機会が豊富だったことです。私が修士課程に入学した当時、すでに複数の氷河観測プロジェクトが行われており、どこも学生を受け入れることに対して積極的でした。それらのプロジェクトの1つに、私の一連の研究の出発点ともいえる、ブータン・ルナナ地方における氷河・氷河湖の観測がありました。入学前に耳にしたヒマラヤの氷河湖決壊洪水の問題に関心があったことや、特に馴染みなかったブータンの氷河に好奇心を掻き立てられたことから、早々とこれを修士論文の研究対象に選びました。こうして、それまでに築かれてきた、ヒマラヤの氷河研究の財産を利用することにより、自分が主体的に取り組める現地観測を短期間で実現することができました。

このころ、私にとって未知の国の氷河を訪れることは、緊張感と期待に溢れた探検的な雰囲気をも十分に感じさせ、そのための準備の一部だと思ふと、慣れない研究論文も夢中になって読むことができました。その過程で、ヒマラヤにある大規模氷河の下流域では、氷河表面を覆う岩屑(デブリ)の熱特性分布が、氷の融解速度の空間分布を大きく変化させることを知りました。さらに、岩屑の熱特性の空間分布は、衛星画像と気象データを組み合わせることによって求められるという、博士課程の研究における基本原理を理解していきました。論文を読んでいて特に印象的だったことは、氷河上の複雑かつ広範囲に分布するデブリ層の熱

特性が、とても簡潔なモデルとして表現されていることでした。また、同著者の関連する論文では、上述のモデルと衛星画像解析を組み合わせることにより、氷河全体の質量収支にまで議論が展開されており、その豪快さに感動しました。個人的には、衛星画像を美しいと感じられることも理由にあり、いつかこのような研究を実現したいという思いが次第に強くなりました。そして、広域観測を得意とする衛星画像の利点にこだわり続けた結果、自ら取得したブータンの現地観測データを用いた解析結果にもとづき、ネパールのエベレスト周辺地域の氷河群にまで解析を広げることができました。

ここで強調したいことは、上述のような研究のおもしろさは、決して私一人の力で獲得したわけではなく、粘り強く建設的な観点で議論して下さった研究室の仲間とともに見出されたということです。しばしば、研究室に夜遅くまで残って議論に付き合ってもらいました。観測のために訪れたブータンでは、山道を歩きながら研究方針について延々と話し合ったこともありました。このように率直に話し合える環境が、私の研究にとって有利であり、この点でも私は恵まれていました。

今でも忘れられません。研究室の定期発表で新たな解析結果を示したところ、全員が興味深そうに私の話を聞き、「おもしろい」と言ってくれました。その体験は正に病みつきであり、やがては、研究を誰かに聞いてもらい、評価してもらえることの喜び・ありがたさの実感となり、研究発表の姿勢にも影響を与えました。最後になりますが、ここまで研究を導いて下さった名古屋大学大学院環境学研究科の雪氷圏研究グループの皆様に心から感謝いたします。